

単純代入特性と公理 X_n

東京理科大学理工学部 佐々木克巳 (Katsumi SASAKI)

中間命題論理において、それが単純代入特性という性質をもつための十分条件を公理 X_n を用いて与える。

命題論理を定義するには、まず、可算無限個の命題変数と、いくつかの論理記号を用意しなければならない。

ここでは、命題変数を表すのに、

$$a, a_1, \dots, a_n, \dots$$

を使うことにする。論理記号は

$$\neg, \wedge, \vee, \supset$$

の4つを用いる。論理式は命題変数と上の論理記号からふつうに定義する。

論理式の集合 L が、次の2条件を満たしているとき、 L を命題論理という。

1) 任意の $A, B \in WFF$ に対し,

$$A, A \supset B \in L \quad \text{ならば} \quad B \in L,$$

2) A, B は任意の論理式とする. A の任意の命題変数 a とし,
 A に現れるすべての a を B で置き換えてできる論理式を $A(a/B)$
 とすると,

$$A \in L \quad \text{ならば} \quad A(a/B) \in L.$$

中間命題論理は, 古典命題論理と直観主義命題論理を用いて次のように定義される. ここでは, 直観主義命題論理として, Gentzen の LJ を用いることにする. 命題論理 L に公理 A を追加してできる命題論理を $L + A$ で表すと, 古典命題論理は $LJ + a \vee \neg a$ で表せるのはよく知られた事実である.

定義 1. 命題論理 L が

$$LJ + a \vee \neg a \supseteq L \supseteq LJ$$

という関係を満たすとき, L を中間命題論理という.

ここで扱われる中間命題論理は

$$LJ + A_1 + \dots + A_n$$

という形で定義される中間命題論理とする ($n=0$ のときは LJ そのものを表す). このような中間命題論理を有限公理化可能であるという. 中間命題論理の中には有限公理化不可能なものが存在するが, ここではそのような中間命題論理は扱わない.

有限公理化可能な中間命題論理は LJ に高々一つの公理を加えて得られることがわかっている。つまり、

$$LJ + A$$

の形で表すことができる。

論理式は、アルファベットの大文字とそれらに添字をつけたものを使って表すことにする。論理式全体の集合を WFF で表す。括弧は結合の強さを示す補助的な記号である。論理記号の結合の強さを強い方から、 $\neg, \wedge, \vee, \supset$ の順だと約束し、同じ論理記号の場合は左のものが強く結合すると約束して括弧を適宜省略する。

また、論理式

$$(a_1 \supset a_2) \wedge (a_2 \supset a_1)$$

を

$$a_1 \equiv a_2$$

で表す。

論理式 A の部分論理式を以下のように帰納的に定義する。 A の部分論理式全体の集合を $Sf(A)$ で表す。

$$Sf(a) = \{a\}$$

$$Sf(\neg A) = \{\neg A\} \cup Sf(A)$$

$$Sf(A \wedge B) = \{A \wedge B\} \cup Sf(A) \cup Sf(B)$$

$$Sf(A \vee B) = \{A \vee B\} \cup Sf(A) \cup Sf(B)$$

$$Sf(A \supset B) = \{A \supset B\} \cup Sf(A) \cup Sf(B)$$

$W \subseteq WFF$ のとき, $\Pi_W(A)$ は, A に含まれるすべての命題変数に W の元を代入してできるあらゆる論理式を並べた一つの列とする. $v(A)$ は A に含まれる命題変数全部の集合とする.

次の定理はよく知られている.

定理 2. 任意の論理式 B に対して, 次の 2 条件は同等である,

$$2.1) \quad B \in LJ + a \vee \neg a,$$

$$2.2) \quad \Pi_{v(B)}(a \vee \neg a) \rightarrow B \in LJ.$$

上の 2.2) は, LJ の決定手続きを用いることによって, それが成り立つかどうか決定可能である. つまり, 定理 1 は「2.1) であるかどうか」の決定手続きを与えていることになる. しかし, 追加される公理の選び方によって定理 1 のような同等性が成り立たない場合もある. 例えば, 次の 2 条件

$$2.1)' \quad B \in LJ + \neg\neg a \supset a,$$

$$2.2)' \quad \Pi_{v(B)}(\neg\neg a \supset a) \rightarrow B \in LJ.$$

は同等にならない. $B = a \vee \neg a$ のときに 2.1)' は成り立つが, $\neg\neg a \supset a \rightarrow a \vee \neg a \notin LJ$ より, 2.2)' は成り立たないからである.

以上のことから, $a \vee \neg a$ という公理は, ある特別な性質をもっているといえよう. このような性質を単純代入特性といい, 正

確には、次のように定義されている。(cf. [4])

定義 3. $A_1, \dots, A_n, B$ は任意の論理式とする. このとき, 次の 2 条件が同等であるならば, 公理の集合 $\{A_1, \dots, A_n\}$ は単純代入特性をもつという.

$$3.1) \rightarrow B \in L \text{ } J + A_1 + \dots + A_n,$$

$$3.2) \Pi_{V(B)}(A_1), \dots, \Pi_{V(B)}(A_n) \rightarrow B \in L \text{ } J.$$

また, 単純代入特性をもつような公理系の存在する中間命題論理は単純代入特性をもつという.

つまり, 中間命題論理が単純代入特性をもつとき, 公理への簡単な代入によって, 任意の論理式がその命題論理において証明可能かどうか分かるのである.

$\{a \vee \neg a\}$ の他に, 以下の公理の集合が単純代入特性をもつことがわかっている.

$$\{\neg a \vee \neg \neg a\} \text{ (Hosoi [2])}$$

$$\{\neg a_1 \vee \neg \neg a_1, a_1 \vee (a_1 \supset a_2) \vee \neg a_2\} \text{ (Hosoi [2])}$$

$$\{\neg a_1 \vee \neg \neg a_1, (a_1 \supset a_2) \vee ((a_1 \supset a_2) \supset a_1)\}$$

(Sasaki [4])

$$\{\neg a_1 \vee \neg \neg a_1, (a_1 \supset a_2) \vee ((a_1 \supset a_2) \supset a_1),$$

$$a_1 \vee (a_1 \supset a_2) \vee \dots \vee (a_{n-1} \supset a_n) \vee \neg a_n\} \text{ (} n \geq 3 \text{)}$$

(Sasaki [5])

以下では、次に定義される公理 X_n を用いて単純代入特性をもつための十分条件を与える。

定義 4. $n \geq 2$ のとき,

$$\begin{aligned} X_n(a_1, \dots, a_{n+1}) \\ &= (a_1 \equiv a_2) \vee (a_1 \equiv a_3) \vee \dots \vee (a_1 \equiv a_{n+1}) \\ &\quad \vee (a_2 \equiv a_3) \vee \dots \vee (a_2 \equiv a_{n+1}) \\ &\quad \dots \\ &\quad \vee (a_n \equiv a_{n+1}). \end{aligned}$$

混乱のないときは、 $X_n(a_1, \dots, a_{n+1})$ を単に X_n と表す。

$LJ + X_2$ は古典命題論理に等しく、 $LJ + X_3$ は、Gödel の 3 値論理に等しい。一般に $LJ + X_n$ は、元の数が n 個の疑ブール代数によって特徴づけられる中間命題論理全部の共通部分になっている。さらに、次の補題が成り立つ。

補題 5. 中間命題論理 L が X_n をもつことと、 L が有限命題論理であることは同等である。

Hosoi [1] では、有限命題論理をある具体的な公理で有限公理化している。そして、Hosoi and Sasaki [3] では、その公理と構

成方法を使って、有限命題論理が単純代入特性をもつことを示した。ここでは、公理 X_n を使ってより強い結果を示す。

目的の定理は次の定理である。

定理 6. L は有限公理化可能な中間命題論理とする。このとき、 $X_n \in L$ ならば L は単純代入特性をもつ。

補題 5 を使うと定理 6 から [3] と同じ結果を得る。

定理 6 を証明するために準備をする。

補題 7. A は任意の論理式、 $v(A)$ の部分集合で、高々 n 個の元をもつものを全部を、 $V_1, \dots, V_k$ で表す。このとき、

$$\Pi_{v(A)}(X_n), \Pi_{V_1}(A), \dots, \Pi_{V_k}(A) \rightarrow A \in L J.$$

証明. $v(A)$ の元の数を m とする m についての帰納法で証明する。

$m \leq n$ のとき、 A が

$$\Pi_{V_1}(A), \dots, \Pi_{V_k}(A)$$

に現れるので明らか。

$m > n$ のとき、 m より小さい m' について定理が成立すると仮定する。さらに、 $v(A) = \{a_1, \dots, a_m\}$ とおき、 $A_{i,j}$

($1 \leq i < j \leq n+1$) は A の中の a_j に a_i を代入してできる論理式とすると、

$1 \leq i < j \leq n+1$ であるようなすべての (i, j) に対して,

$$a_i \equiv a_j, A_{i,j} \rightarrow A \in L_J$$

である. よって,

$$X_n, A_{1,2}, \dots, A_{1,n+1}, A_{2,1}, \dots, A_{n,n+1} \rightarrow A \in L_J. \quad (*1)$$

$v(A_{i,j})$ は元の数 $v(A)$ より小さいので帰納法の仮定より,

$$\Pi_{v(A_{i,j})}(X_n), \Pi_{V_1'}(A), \dots, \Pi_{V_k'}(A) \rightarrow A_{i,j} \in L_J.$$

($v(A_{i,j})$ の部分集合で, 高々 n 個の元をもつものを全部を,

$V_1', \dots, V_k'$ とした.)

さらに, $v(A_{i,j}) \subseteq v(A)$ だから,

$$\Pi_{v(A)}(X_n), \Pi_{V_1}(A), \dots, \Pi_{V_k}(A) \rightarrow A_{i,j} \in L_J.$$

(*1) と cut によって,

$$\Pi_{v(A)}(X_n), \Pi_{V_1}(A), \dots, \Pi_{V_k}(A) \rightarrow A \in L_J$$

を得る.

定義 8. 任意の $B, C \in S_f(A)$ に対して,

$$B \neq C \quad \text{ならば} \quad B \neq C \in L_J$$

が成り立つとき, A は reduced form であるという.

A が reduced form のとき, $S_f(A)$ の元の総数を A の degree といい, $d(A)$ で表す.

命題変数の集合 V から構成される reduced form の論理式全体の集合 $R(V)$ で表す. さらに,

$$R^m(V) = \{A \mid A \in R(V), d(A) \leq m\}$$

とおく.

つまり A が reduced form であるとは, $S f(A)$ から任意に異なる元を 2 つとってきたとき, それらは $L J$ で同等にならないことをいう.

例 1. $a \supset a$ は reduced form である.

証明 $S f(a \supset a) = \{a, a \supset a\}$,

$$a \equiv a \supset a \notin L J.$$

例 2. $a \wedge a$ は reduced form でない.

証明 $S f(a \wedge a) = \{a, a \wedge a\}$

$$a \equiv a \wedge a \in L J.$$

補題 9. V が命題変数の有限集合のとき, $R^{\mathbb{M}}(V)$ も有限集合である.

補題 10. 任意の論理式 A に対して, ある $B \in R(v(A))$ が存在して, $A \equiv B \in L J$.

証明. $C \neq D$ であり $C \equiv D \in L J$ であるような論理式の対 $(C, D) \in S f(A) \times S f(A)$ の数 m についての帰納法で証明する.

$m = 0$ のとき, A は reduced form であるから明らか.

$m > 0$ のとき, m より小さい m' について補題が成立すると仮定する. $m > 0$ だから, $C \neq D$ であり $C \equiv D \in L J$ であるような論

理式の対 $(C, D) \in S f(A) \times S f(A)$ が存在する.

$d(C) \leq d(D)$ としても一般性は失われない. A の中の D をすべて C で置き換えて得られる論理式を A^* とすると, 帰納法の仮定により A^* に対して, ある $B \in R(v(A^*))$ が存在して,

$$A^* \equiv B \in L J.$$

$v(A^*) \subseteq v(A)$ であり, $A \equiv A^* \in L J$ だから,

$$B \in R(v(A)) \quad \text{かつ} \quad A \equiv B \in L J.$$

補題 11. A はちょうど m 個の命題変数 $a_1, \dots, a_m$ を含む論理式とする. A^* は A の $a_1, \dots, a_m$ に reduced form の論理式

$$B_1, \dots, B_m$$

を代入してできる論理式とする. このとき,

$$\Pi_{R^{n+1}(v(A^*))}(X_n), \Pi_{R^n(v(A^*))}(A) \rightarrow A^* \in L J.$$

証明. $S f(B_1) \cup \dots \cup S f(B_m)$ の元の数 k についての帰納法で証明する.

$k \leq n$ のとき, $\Pi_{R^n(v(A^*))}(A)$ に論理式 A^* が現れるので明らかである.

$k > n$ のとき, k より小さい k' について補題が成立すると仮定する. $S f(B_1) \cup \dots \cup S f(B_m)$ の元を degree の小さい方から並べた列を $C_1, \dots, C_k$ とする. B_i に含まれる C_t を C_s で置き換

えて得られる論理式を $B_{i,s,t}$ とし A の命題変数 $a_1, \dots, a_m$ に $B_{1,s,t}, \dots, B_{m,s,t}$ を代入して得られる論理式を $A_{s,t}$ とすると, $1 \leq s < t \leq n+1$ であるようなすべての (s, t) に対して,

$$C_s \equiv C_t, A_{s,t} \rightarrow A^* \in L_J$$

である. よって,

$$X_n(C_1, \dots, C_{n+1}), A_{1,2}, \dots, A_{1,n+1}, A_{2,1}, \dots, A_{n,n+1} \rightarrow A^* \in L_J. \quad (*2)$$

$S_f(B_{1,s,t}) \cup \dots \cup S_f(B_{m,s,t})$ の元の数は k より小さいので帰納法の仮定より,

$$\Pi_{R^{n+1}}(v(A_{s,t}))(X_n), \Pi_{R^n}(v(A_{s,t}))(A) \rightarrow A_{s,t} \in L_J.$$

さらに, $v(A_{s,t}) \subseteq v(A^*)$ だから,

$$\Pi_{R^{n+1}}(v(A^*))(X_n), \Pi_{R^n}(v(A^*))(A) \rightarrow A_{s,t} \in L_J.$$

(*2) と cut によって, 補題を得る.

定理 6 の証明.

$$L \in X_n$$

とする.

L は有限公理化可能だから, ある公理 A が存在して

$$L = L_J + A.$$

次の列に現れる論理式全部の集合が単純代入特性をもつことを示そう. (補題 9 より次の列は有限列である.)

$$X_n, \Pi_{R^{n+1}(V)}(X_n), \Pi_{R^n(V)}(A)$$

$$(V = \{a_1, \dots, a_n\})$$

$B \in L$ と仮定する. 補題 7 より $v(B)$ の部分集合で, 高々 n 個の元をもつものの全部を $V_1, \dots, V_k$ で表すと,

$$\Pi_{v(B)}(X_n), \Pi_{V_1}(B), \dots, \Pi_{V_k}(B) \rightarrow B \in L J. \quad (*3)$$

$\Pi_{V_1}(B), \dots, \Pi_{V_k}(B)$ に現れる任意の論理式を B^* とする. B^* は高々 n 個の変数をもつ論理式である. $B \in L$ より

$$B^* \in L$$

よって, 補題 10 を使えば, 次の条件を満たす論理式

$$A_1, \dots, A_m$$

が存在する.

1) 各 A_i は A のすべての命題変数に $R(v(B^*))$ の元を代入して得られる,

$$2) A_1, \dots, A_m \rightarrow B^* \in L J. \quad (*4)$$

補題 11 より, 各 A_i ($i=1, \dots, m$) に対して,

$$\Pi_{R^{n+1}(v(A_i))}(X_n), \Pi_{R^n(v(A_i))}(A) \rightarrow A_i \in L J.$$

$v(A_i) \subseteq v(B^*)$ より,

$$\Pi_{R^{n+1}(v(B^*))}(X_n), \Pi_{R^n(v(B^*))}(A) \rightarrow A_i \in L J.$$

(*4) と cut を m 回使って

$$\Pi_{R^{n+1}(v(B^*))}(X_n), \Pi_{R^n(v(B^*))}(A) \rightarrow B^* \in L J.$$

$v(B^*) \subseteq v(B)$ であり, B^* は高々 n 個の変数をもつから,

$$\Pi_{R^{n+1}}(v(B))(X_n), \Pi_{R^n}(V_1)(A), \dots, \Pi_{R^n}(V_k)(A) \\ \rightarrow B^* \in L J.$$

(*3) と cut を何度か使って,

$$\Pi_{v(B)}(X_n), \Pi_{R^{n+1}}(v(B))(X_n), \\ \Pi_{R^n}(V_1)(A), \dots, \Pi_{R^n}(V_k)(A) \rightarrow B \in L J.$$

上の式の左辺に現れる論理式は

$$X_n, \Pi_{R^{n+1}}(V)(X_n), \Pi_{R^n}(V)(A) \\ (V = \{a_1, \dots, a_n\})$$

のいずれかの論理式に $v(B)$ の元を代入して得られる.

故に, L は単純代入特性をもつ.

参考文献

- [1] T. HOSOI, On the axiomatic method and the algebraic method for dealing with propositional logics, Journal of Faculty of Science, University of Tokyo, Sec. I, 14 (1967), pp. 131-169.
- [2] T. HOSOI, Pseudo two-valued evaluation method for intermediate logics, Studia Logica 45 (1986), pp. 3-8.
- [3] T. HOSOI and K. SASAKI, Finite logics and the simple substitution property, Bulletin of the Section of Logic, 19 (1990), pp. 74-78.

[4] K. SASAKI, The simple substitution property of intermediate propositional logics, Bulletin of the Section of Logic 18 (1989), pp. 94-99.

[5] K. SASAKI, The simple substitution property of Gödel's intermediate propositional logics S_n 's, Studia Logica, 46 (1991), pp. 47-57.